

HA NE DO
羽根戸古墳群 5

-羽根戸古墳群C群第25号墳の調査-

2003

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから、大陸よりもたらされる様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人や物の交流は盛んで、その結果多くの歴史遺産が培われ今日に至っています。これらかけがえのない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では開発に伴って消滅する埋蔵文化財について、事前に発掘調査を行い、記録保存という形で、往時の有様を後世に伝えています。

本書は、平成13年度に行いました羽根戸古墳群G群第25号墳の調査の内容について報告するものです。この調査では、比較的初期の形を留める横穴式石室が検出され、遺物も良好な状態で出土するなど、多くの成果を挙げることができました。今回の調査により判明した多くの事実は、この地域における歴史を考える上で、重要な手がかりとなるでしょう。

この書が、市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する御理解の一助となり、また考古学上、地域史上の研究資料として御活用いただければ幸いです。最後になりましたが、今回の調査において費用の負担をはじめとする御協力を戴きました、ジェイフォン株式会社をはじめとする関係各位に深く感謝申し上げます。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 生 田 征 生

例　　言一

- ・本書は福岡市教育委員会が2002年1月15日から2002年2月21日にかけておこなった、羽根戸古墳群G群第25号墳の発掘調査報告である。調査は藤巣上寛が担当した。
- ・本書使用の標高は海拔高。方位は磁北である。
- ・本書の執筆、編集は藤巣が行った。
- ・本書に関する資料はこの後、福岡市埋蔵文化財センターに収藏する予定である。

目 次

I はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II 羽根戸古墳群について	2
III G群第25号墳の調査	4
1. 現況	4
2. 墳丘	5
3. 主体部	9
4. 遺物	11
5. その他の遺構	13
IV 結語	14

挿図目次

図1 早良平野西部の群集墳 (1/50,000)	図8 主体部 (1/40)
図2 羽根戸古墳群 (1/8,000)	図9 閉塞 (1/40)
図3 現況測量 (1/200)	図10 主体部内遺物出土状況 (1/20)
図4 墳丘遺存状況 (1/200)	図11 墳丘出土遺物 (1/2,1/3)
図5 土層 (1/40)	図12 周溝内出土遺物 (1/3)
図6 墳丘内遺物出土状況 (1/10)	図13 主体部内出土遺物 (1/20)
図7 周溝内遺物出土状況 (1/20)	図14 その他の遺構 (1/60)

図版目次

図版1 1 G-25号墳現況 (北東から)	2 G-26号墳現況 (北から)
3 G-25号墳埴輪 (東から)	4 G-25号墳埴輪 (北西から)
5 G-25号墳地山整形 (東から)	
図版2 1 G-25号墳石室奥壁 (西から)	2 G-25号墳石室入り口 (西から)
3 G-25号墳石室左側壁 (南から)	4 G-25号墳石室右側壁 (北から)
5 G-25号墳石室奥壁左隅 (南西から)	6 G-25号墳石室奥壁右隅 (北西から)
図版3 1 G-25号墳閉塞状況 (西から)	2 G-25号墳閉塞状況 (東から)
3 G-25号墳閉塞石 (西から)	4 G-25号墳石室内遺物出土状況 (北西から)
5 G-25号墳周溝内遺物出土状況 (南西から)	6 G-25号墳周溝内遺物出土状況 (北から)
図版4 出土遺物	

I はじめに

1. 調査に至る経緯

平成 13 年 10 月 22 日、ジェイフォン西日本株式会社より、西区大字羽根戸字地蔵尾 875 番 1 における無線基地局建設に関して、埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受けて、福岡市教育委員会では踏査及び試掘調査を行い、当該地に古墳が存在することを確認した。当初の建設予定地では 2 基の古墳（G 群第 25・26 号墳）が存在していたが、両者の協議の結果、設計の一部を変更して第 26 号墳に影響の及ばない方針を探り、破壊の免れない 25 号墳のみの調査を行うこととなった。

調査の開始は、平成 14 年 1 月 15 日。同年 2 月 21 日にすべての作業を終了した。

2. 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査委託 ジェイフォン株式会社

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部 埋蔵文化財課 課長 山崎純男 検査第 1 係長 山口譲治

事前審査 文化財部 埋蔵文化財課 事前審査係長 口田寿夫 大塚紀宜 田上勇一郎

任務担当 宮川英彦

調査担当 藏富士寛

調査作業 加島定次郎 高瀬孝二郎 西嶋利規 西島マツ子 内崎ムラ子 西嶋洋子

西畠盛行 平田千鶴子 宮原邦江 駒坂チカ 駒坂信重 駒坂ミサヲ

整理作業 柴田加津子 萩本忠子 口名子節子

遺跡調査番号	0151	遺跡略号	HDK-G-2
地番	西区羽根戸字地蔵尾875-1	分布地図記号	叶岳 105
開発面積	212m ²	調査面積	212m ²
調査期間	2002.1.15～2002.2.21		

II 羽根戸古墳群について

早良平野の西南部側にある飯盛山の山麓には数多くの古墳群が営まれていることで知られる(図1)。羽根戸古墳群は飯盛山の東北麓に存在する古墳群で、現在140基を超える古墳の存在が確認されている。更に東南麓にはこれと同規模の金武古墳群もあって、飯盛山東麓は福岡市内においても有数の古墳集中地域となっている。また近年では、羽根戸古墳群の南側に位置する羽根戸南古墳群の調査が行われ、今までに古墳時代前期(集成編年3期)の前方後円墳2基を含む、計27基に及ぶ古墳の調査が実施されている(米倉編2001)。過去、古墳時代後期を通過する古墳が確認されていなかった羽根戸・金武古墳群に対して、羽根戸南古墳群はほぼ古墳時代を通じた古墳群形成がなされていることに特色がある。

羽根戸古墳群はA～Qという17の支群に区分されている。過去、数次にわたる調査が実施されており、下記に挙げる報告書も刊行されて、ある程度であるがその内容を窺うことができる。古墳主体部は、ごく少數の竪穴式小石室を除けば、その半が横穴式石室によって構成される。これまでの調査結果によれば、A群第4号墳やN群第6・7号墳から6世紀初頭(MTT15型式期)に相当する須恵器が出土しており、この段階には古墳の築造が開始されていたことが分かる。また、羽根戸古墳群中、最奥部に位置するQ群は、古墳時代終末期における群集墳のあり方を示すものとして注目される(田村1999)。羽根戸古墳群における群構造やその変遷については、土井基司氏による詳細な研究がなされている(土井1992)。また、前述の金武古墳群については、柳沢一男氏による分析が行われており(柳沢1981)、飯盛山山麓における群集墳の様相は次第に明らかとなりつつある。

なお、具体的な出土位置は明らかではないが、羽根戸古墳群出土中の出土品として、現在伊勢神宮が所蔵する装飾付器台と龜がある。これら遺物については、小田富士雄氏による報告がなされており(小田1964)、優品として広く知られる。

文献

- 小田富士雄「九州古式須恵器集成(八)」「九州考古学」22 九州考古学会 1964年
田村 哲「鞍未別群集墳の展開—北部九州を中心に—」「古文化談叢」第43集 九州古文化研究会 1999年
土井基司「横穴式石室からみた群集墳の様相」「九州考古学」第67号 九州考古学会 1992年
柳沢一男「金武古墳群の構成!」重要遺跡確認調査報告書 1 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第68集 1981年
米倉秀記編「羽根戸南古墳群」「福岡市埋蔵文化財調査報告書 第661集 2001年

羽根戸古墳群関係報告書

- 長田信也編「羽根戸古墳群」「福岡県文化財調査報告書 第57集 1990年
横山尚樹・山中尚大編「羽根戸古墳群」「福岡市埋蔵文化財調査報告書 第180集 1988年
宮井哲郎編「羽根戸古墳群」「福岡市埋蔵文化財調査報告書 第196集 1989年
瀬本正志編「羽根戸古墳群 2」「福岡市埋蔵文化財調査報告書 第345集 1993年
加藤與彦編「羽根戸古墳群(3)」「福岡市埋蔵文化財調査報告書 第346集 1993年
小林義彦編「羽根戸古墳群 4」「福岡市埋蔵文化財調査報告書 第347集 1993年
長家 幸「羽根戸古墳群C・N群第2次調査」「福岡市埋蔵文化財年報」Vol. 8 1995年

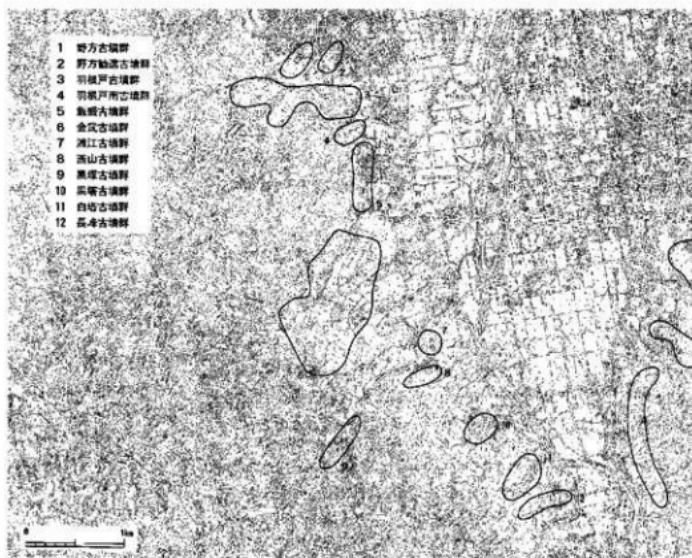


図 1 早良平野西部の群集墳 (1/50,000)



図 2 羽根戸古墳群 (1/8,000)

III G群第25号墳の調査

1. 現況

飯盛山から延びる一小丘陵上に、羽根戸古墳群N群そしてG群は存在する。両者はごく近接して存在するが、N群は丘陵の南側斜面を占地するのに対し、G群は北側斜面およびその裾部に広がりを持つという違いがある(図2)。この立地の差は、それぞれにおける群形成の時期差も反映しているのだろう。今回調査を行ったG群第25号墳および近接して存在する26号墳は、調査に先行する踏査の際、新たに発見された古墳である。N群、G群の境界部分に位置しているが、上述した立地の違いを考慮すると、両者ともN群よりもG群中に含めて考えるのが妥当であろう。

25号墳は丘陵の南斜面裾付近に存在する。基壇には里道が走り、墳丘の北側半分近くが失われている。主体部の周辺には大きな陥没があり、石室石材と目される石塊も散在するなど、古墳がすでに大きな破壊を受けていることが現況からも確認できた。ただ、墳丘部分と推測される高まりは、高さ1mほどを測り、その裾部は里道の影響で現状では橢円形を呈してはいるものの、本来は径10m弱ほどの円墳であったことは容易に想像でき、古墳としての姿はある程度留めていた(図3)。

また、25号墳の西側3m程の位置に26号墳が存在する。25号墳に比して丘陵よりのやや高所に位置し、わずかではあるが墳丘の高まりを見ることができる。墳丘径は現況で5~6mを測り、中央部分には浅い窪部がある。周辺に石材は認められない。

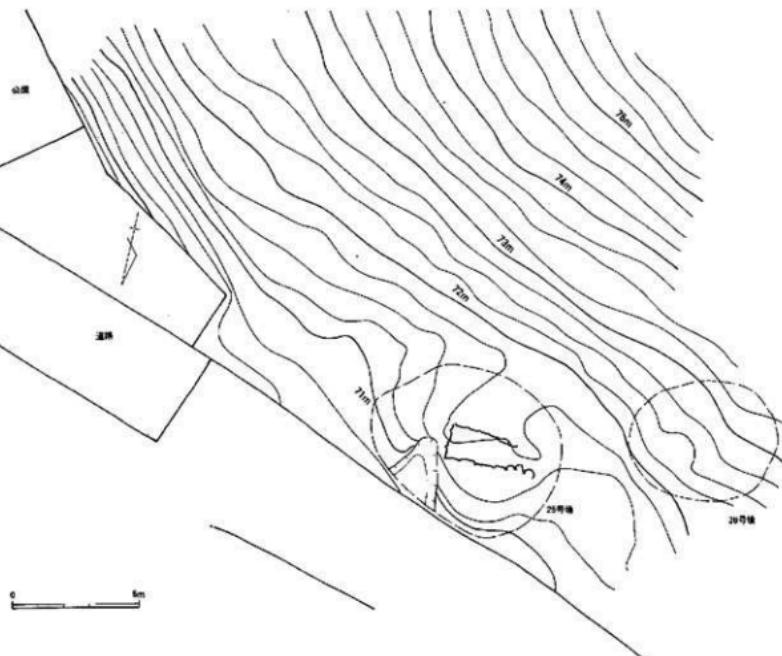


図3 現況測量 (1/200)

2. 墳丘

(1) 墳丘形態(図4)

墳丘の調査はまず、5本のトレンチによって墳丘の遺存状況を把握した後、人力による表土および周溝内埋土の除去を行った。調査区内における古墳周辺の表土は、車機による剥ぎ取りを行っている。そして墳丘の遺存状況を示したのが図4である。

先に述べたように、墳丘の北側は畠道により削り取られているが、南側を中心とした遺存状況の良い部分を考慮すれば、墳丘は径8m程の円形に復元できるだろう。墳丘頭部は丘陵側に向かうにつれてやや高くなり、全体的に70~80cm程の盛土が残っている。

周溝は破壊を受けていない墳丘南側を中心に検出できた。墳丘南側(丘陵側)の周溝は1.5~2.5mと幅広く、深さも0.4~0.6mを測る。一方、墳丘東側の周溝は0.5~0.8mと狭くなり、深さも0.2m程となる。墳丘西側における周溝の形態は判然としない。前庭部右側壁の石材は抜き取られており、その際の攪乱による影響も考えられる。

(2) 墳丘土層(図5)

墳丘形態を確認した後、各トレンチを掘り下げ、墳丘の構築状況を観察した。墳丘南側に設定したトレンチから順にI~Vトレンチとし、以下に各トレンチ土層の所見について述べる。

I トレンチ土層

主部(横穴式石室)の右側壁側に設定したトレンチである。このトレンチではまず、石室中心より3.4~5.7mの位置に周溝を確認した。周溝上には黒褐色土が堆積しているが、これは墳丘の一部を断ち切るように存在しており、古墳の築造後ある程度の時間を経て形成されたものである。従って旧状を留める周溝部分は3.4m地点より南側であるといえる。周溝断面は緩やかな弧を描くもので、急な立ち上がりや、周溝底部の平坦面は存在しない。内部の堆積土はぶい黄褐色土。

周溝の立ち上がりは、現況では外側が71.9m、内側が71.5mと40cm程の比高差がある。周溝外側

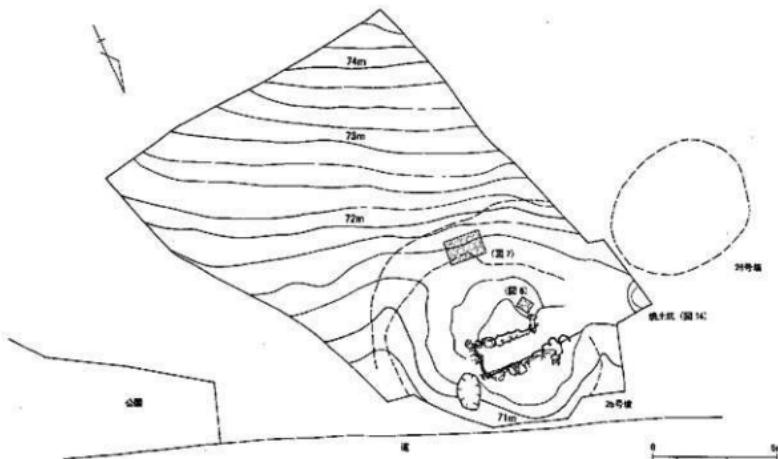


図4 墳丘遺存状況 (1/200)

は丘陵側に当たるため、本来の姿においても周溝外側の高い状況に変わりは無かっただろう。周溝底部は標高71.3m。尚、石室中心より2.8m地点では地山の高まりが存在する。上面を黒褐色土に削られることも勘案すると、地山整形時、周溝内側には山状の高まりを造り出していたことが窺える。

墳丘下面、つまり石室中心より2.6m地点から石室側では、やや下降しながらも1.5m程の平坦面を形成している。この後、石室近く(1.2m地点)には石室構築のための掘り込みがある。深さは20~30cm程。掘り込み部分の上端は石室底石のそれと高さをそろえており、基底石との隙間には10~12層といった土を充填する。地山平坦面上にある13層は地山と共に掘り込みがなされており、この状況をみれば13層は主体部築造前の旧表土とみなすことができよう。

墳丘の盛土は4~9層が相当する。大きく、①黄褐色土、②褐色土の2種に大別することができ、石室基底より2石目まではそれを交互に積み上げる。墳丘の遺存は高いところで0.9m程。

II トレンチ土層

主体部奥壁右隅から北東方向に設定したトレンチである。このトレンチでは石室中心より3.1~3.4mの位置に周溝の立ち上がりを確認した。周溝の深さは17~10cm程で、Iトレンチ周溝の深さに比して浅い。底部は幅0.5mの平坦面となる。Iトレンチでの所見と同じく、墳丘側の周溝立ち上がりの方が高く、その立ち上がり部分から石室中心側へ0.6mまでの部分は地山の高まりが存在する。この高まり部分や周溝の上部には黒褐色土が堆積するが、この層は墳丘や地山高まりの一剖を切り込む。地山の高まりから石室側へ1.9mほど地山平坦面が続くが、これも石室近くになると、20cm程の急な落ち込みをみせる。これは石室構築用の掘り込み部分であり、掘り込みは15層上面より行いこの部分には12~14層を充填する。15層は主体部築造前の旧表土であろう。墳丘盛土は3~11層が相当する。Iトレンチと等しく①・②層が交互に積み上げられる。墳丘の遺存は高い部分で0.8m程。

III トレンチ土層

主体部奥壁側に設定したトレンチで、地山には木根による擾乱(12~13層)がある。石室中心より3.1m程の地点に地山の高まりがあるが、この部分が周溝内側の立ち上がりに相当。このトレンチ部分では墳丘外側(北側)の削平が激しく、周溝外側の立ち上がりは確認できなかつたが、近辺の周溝のあり方をみれば、立ち上がりは石室中心より4mほどの地点に求めることができよう。周溝底部は標高71.3m前後であろうか。11層が旧表土に該当する。墳丘盛土は2~8層で、その遺存は60cm程。

IV トレンチ土層

主体部左側壁側に設定したトレンチである。トレンチの設定範囲では周溝の痕跡をみるとできなかった。地山は平坦であるが、その上の13層は石室中心より1.8mの地点を中心として高まりをみせている。土質から、他のトレンチで確認されている旧表土がこの13層に相当しよう。墳丘盛土は1~11層で、その遺存は70cm程。

V トレンチ土層

石室入口側に設定したトレンチである。10層は旧表土であろう。上層を観察すれば、まず石室中心から27m地点の地点では10層上面より15cmほど掘り下げ、そのまま地山も削り込んで、石室入口へと続く緩やかな斜面を作り出していることがわかる。次に権石を設置した後に8層を充填し、地山の傾斜部分を平坦にしている。8~10層上面が石室通路部の床面に相当するのであろう。

閉塞石を置いて入口を閉塞する際、多くの塊石と共に7層を被せる。この時に、10層を掘り下げることによって生じた段部分は完全に埋没する。この7層上面までが、古墳本来の状況を示す部分であろう。尚、5・6層を切る形で4層が存在する。4層は黒褐色を呈し、I・II・IIIトレンチに存在した黒褐色土層(1層)と同一の層であろう。

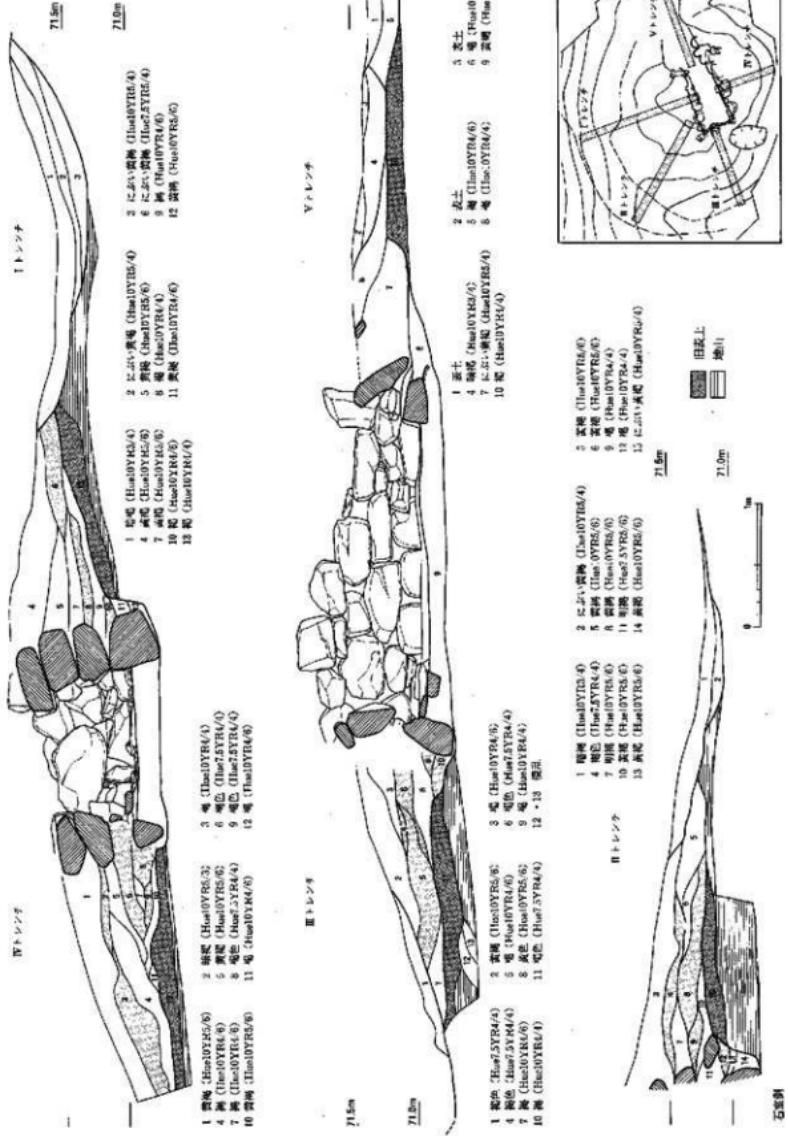


図 5 土層 (1/40)

(3) 遺物出土状況 (図6・7)

今回調査における出土遺物の大半は古墳南側の周溝内に集中していた。また墳丘内からは、蓋杯が2組並んで検出できた。以下では、それぞれの出土状況について述べる。

墳丘

墳丘の南北側、石室右袖部付近の墳丘巾より、蓋杯2組が出土した(図6)。

蓋杯はほぼ南北方向に並び、蓋が上、杯身が下の正位置で出土している。蓋は杯身より少しはずれてはいるが、杯身と蓋の組み合わせはきちんと保たれている。

北側の蓋杯を蓋杯1、南側のものを蓋杯2とすれば、墳丘遺存面に対して、蓋杯1は深さ10cmほど下位に、蓋杯2はその直下に存在する。土層の断面等からは掘り込みを確認できなかったが、何らかの形で、墳丘内に埋置されたものだろう。

周溝

周溝内では、墳丘南側から土器が集中して出土した。底面からもまとまった須恵器が出土している(図7)。器種では蓋杯が多い。底面の遺物は混然としており、比較的上層の遺物と接合関係にあることから、これら遺物は流れ込みによるものであることは明らかである。供献された古墳の候補として、25号墳の他、1)近接する26号墳 2)同一丘陵上のN群諸古墳を挙げることができるので、土層観察等からは判断できなかったので、他の要素から何が妥当であるかを考えてみたい。

2)について、調査により判明した古墳の時期はこれら遺物と大きな時期の開きがあり、今の所では2)である可能性は低い。また1)では26号墳から最も近い周溝南西部ではないことが問題となる。既定された範囲に集中するという状況を考えると、25号墳に伴うものとして考えるのが適当であろう。

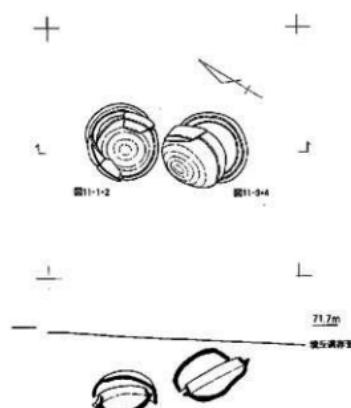


図6 墳丘内遺物出土状況 (1/10)

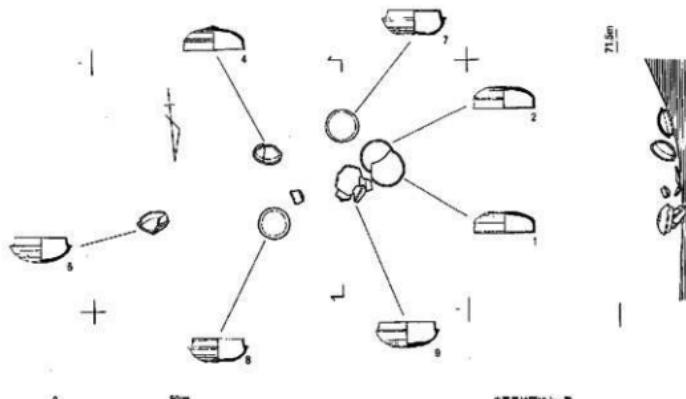


図7 周溝内遺物出土状況 (1/20)

3. 主体部

(1) 横穴式石室の構造(図8)

25号墳主体部は単室無羨道の横穴式石室で、主軸をN 85° -Wに取り、西に向かって開口する。天井部を失い石室各壁体も内側への迫り出しが著しい。玄室は長さ2.35m、幅は奥壁側1.3m、入口側0.9mを測る。使用石材はすべて花崗岩。

玄室の石積みは、面こそそろえられているが、やや雑で石材同士の隙間が大きい。奥壁は2~4段の石積みが残る。最下段には4石のやや小振りな石材を縦位に立てて配置する。その上面は右隅側に向かって下がる、横方向の日地が通る。更に上には人形石材2石の積み上げをみる。左側のそれが特に大きい。この石材は内側に迫り出しており原位置を保っていない。この2石固定のため、小形石材が4石、最下段石積み上に配される。更に上位には1石が残るのみ。

側壁には3~4段の石積みが残る。最下段には右側壁側が5石、左側壁側が4石、横位もしくは縦位に石材を配する。奥・側壁といった玄室の最下段には、いずれにも大形石材の使用は認められない。使用石材では、右側壁側は比較的均一であるのに対し、左側壁側では大形石材+小形石材という組み合わせになるという違いがあるが、ある程度横目地が通るという点では共通する。

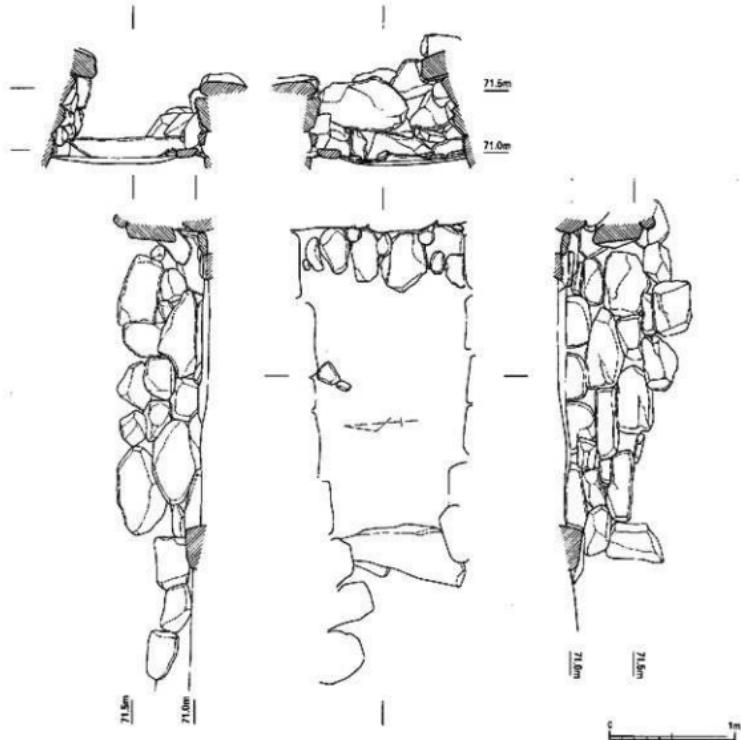


図8 主体部(1/40)

玄室床面には、奥壁沿いに敷石がある。平坦な石材を5石敷きつめ、その隙間に小石を配する。敷石が奥壁沿いにのみ、尾床状に敷いていた可能性も否定できないが、左側壁沿いの床面上に残る2石を敷石材とみれば、玄室床面全体に敷石が存在したとみるべきであろう。玄室床面は地山の整形面上に20cm程の黄褐色土を入れることにより作り出す。そのため玄室底部の石材は、その半ばが顔を出しているに過ぎない。

石室入口では、横長の石材を1石配して柵石とし、両端に石積みを行って袖部を形成する。柵石は前述の黄褐色土上に設置される。柵石上には右側に2石、左側に1石の石積みが残る。袖部の基底石(柵石直上の石材)をみれば、左側の石材がわずかに内側へ迫り出すのみで、無袖の形状に近い。だが、右側2段目の石材は扁平な石材を横位に立てて配置しており、袖部としての意識は確実に存在している。左袖部の先には、更に2石が配される。上部に石積みはなく、この部分は前庭部と呼ぶべきだろう。右側の石材は残っていないが、外側に向かって緩やかに開く左側の状況をみると、この石室は「ハ」の字に開く前庭部を有していたのだろう。

(2) 閉塞方法(図9)

石室人口部分には、閉塞石が遺存していた。閉塞には扁平な花崗岩の塊石を用い、その前面には、同じく花崗岩の塊石を積み上げて閉塞を行う。

閉塞石は石室内へ向けて内傾しており、柵石との間には2石の塊石が存在する。これは後世の櫛乱等により混入したものとは考えにくい。

閉塞行為を以下にまとめると、まず閉塞石は柵石に掛かるように配置される。右袖部の状況をみると、袖部との間に何とかが噛ませてあったようだ。そして閉塞石の下部にはやや大形の石材を並べ、閉塞石を固定する。そして更にその上部に、小振りの塊石を積み上げることによって閉塞を完了する。尚、閉塞の途中に追跡その他の痕跡をみることはできなかった。

(3) 遺物出土状況(図10)

敷石上から、刀子が1点出土した。刀子は敷石の間で検出され、中央より2つに折れていた。他の石室内出土遺物は、すべて埋土中のものであり、確実に石室内に存在したものではない。

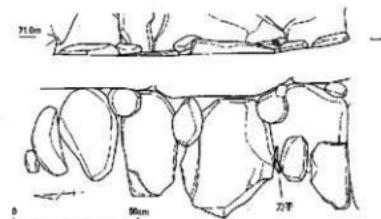


図10 主体部内遺物出土状況(1/20)

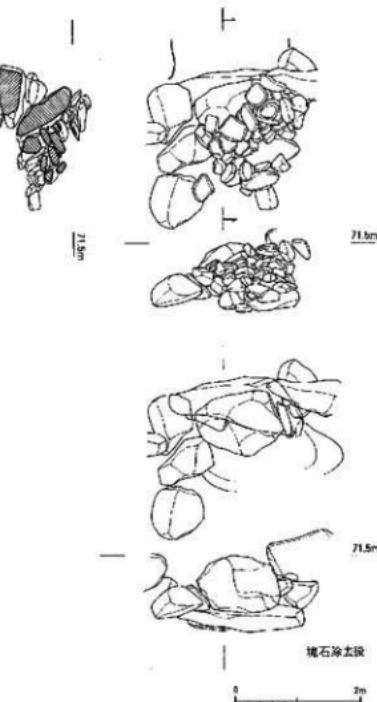


図9 塞(1/40)

1. 遺物

(1) 墳丘出土の遺物(図11)

墳丘出土の遺物には、先に述べた墳丘内に埋置されていたものと、表上掘り下げ中に出土したものとの二者がある。後者はもちろん原位置を留めているものではない。以下にそれぞれの遺物について、その特徴を述べる。

墳丘内出土

1~4がこれに相当する。先に述べた蓋杯1が1・2、蓋杯2が3・4である。1は杯蓋で、口径14.6cm、器高4.5cmを測る。天井部と体部の境には、弱い凸線が巡る。口縁端部はわずかに段をなし、その端面は凹状を呈する。杯底部は丸みを帯び、全体の2/3程の範囲に回転ヘラケズリを施す。内面天井部には当て具痕が残る。2は杯身で、口径12.0cm、受部径14.4cm、器高4.4cmを測る。立ち上がりは短く内傾する。杯底部は丸みを帯び、全体の2/3程の範囲に回転ヘラケズリを施す。外面部にはヘラ記号を有する。他の1・3・4に比して、砂粒が多く含む粗い胎土を用いている。3は杯蓋で、口径13.8cm、器高4.8cmを測る。天井部と体部の境には浅い沈線を巡らせる。口縁部はわずかに外反し、端部付近に浅い沈線を施す。天井部には、全体の2/3程の範囲に回転ヘラケズリ。4は杯身。口径12.4cm、受部径15.3cm、器高4.6cmを測る。立ち上がりは、高さ1.4cm程で内傾する。杯底部には全体の2/3程の範囲に回転ヘラケズリを施す。内面部には当て具痕が残る。

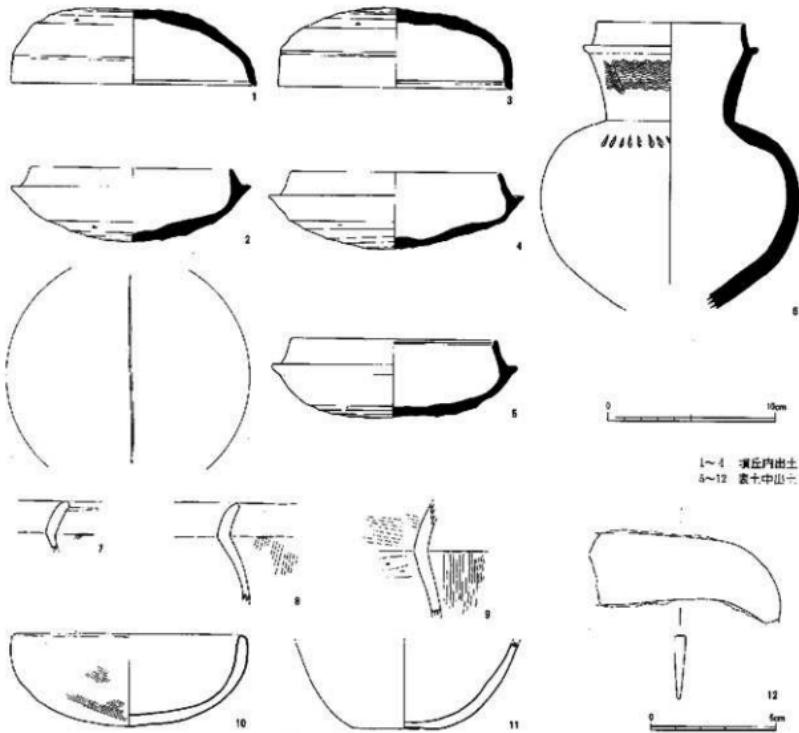


図11 墳丘出土遺物 (1/2, 1/3)

表土中出土

5・6が須恵器、7~11が土師器である。5は杯身で、口径12.2cm、受部径14.7cm、器高4.7cmを測る。立ち上がりは1.5cm程で、内傾する。端部近くには浅い沈線を巡らす。受部下が屈曲し、受部はやや水平に張り出す。杯底部には、全体の2/3程の範囲に回転ヘラケズリを施す。焼成はやや不良で、軟質。6は有蓋短頸壺、底部を欠損するが、おそらく台部があったのだろう。口径(復元)8.7cm、胴部最大径(復元)15.3cmを測る。頸部には波状文、肩部には指突文をそれぞれ施す。口縁端部は段をなさず、丸く収める。7~9・11は甕で、7・8が口縁部片、9が頸部片、11が底部片である。7・8は外器面にハケ目調整。9は外器面では胴部にハケ目調整、内器面では口縁部に横方向のハケ目調整、胸部には横方向のケズリを施す。11は摩耗が激しく調整は不明。10は甕。口径(復元)13.4cm、器高5.8cmを測り、外器面にはハケ目調整を施す。12は鉄製品。鎌であろうか。刃部幅は最大で3.0cmを測る。

(2) 周溝出土の遺物(図12)

周溝出土遺物は、ほぼすべてが埴丘南側部分の周溝より出土した。図12の内、1~9が須恵器で、10が土師器である。以下にその特徴を述べる。

1~4は蓋杯である。1は口径11.9cm、器高4.3cmを測る。天井部と体部の境を強くなれることにより、鋭い稜線を作り出している。口縁端部は段をなし、端面は強く凹む。焼成は良好で、一部自然釉が付着する。2は口径12.1cm、器高4.3cmを測る。天井部と体部の境に深い沈線を施し、稜線を作り出す。口縁端部はわずかに外反し、にぶい段をなす。段の部分には弱い沈線が巡る。天井部に

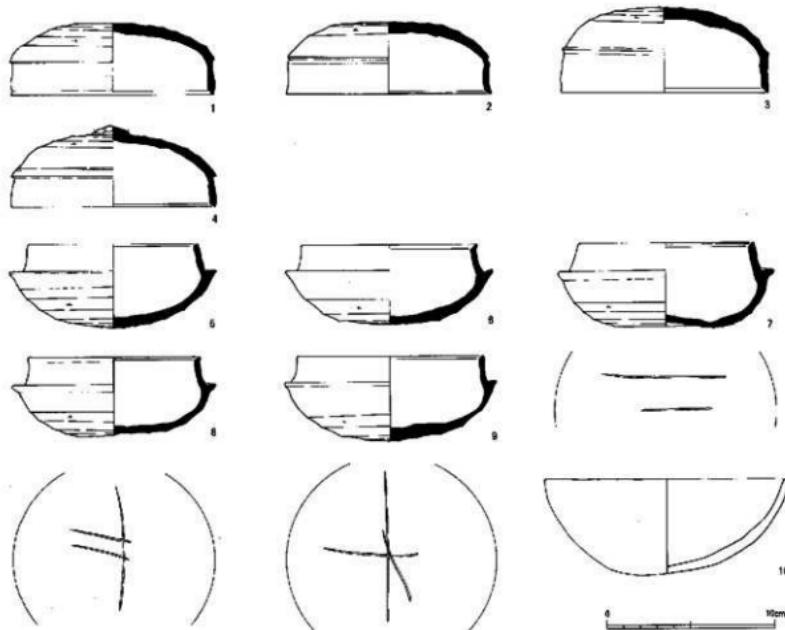


図12 周溝内出土遺物(1/3)

は2/3程の範囲にわたって回転ヘラケズリ。3は口径12.3cm、器高5.1cmを測る。大井部と体部の境には鋭い次帶が巡る。口縁端部は段をなし、他に比べ、口径に比して器高が比較的高く、端面は強く凹む。大井部は丸みを帯び、2/3程の範囲にわたって丁寧な回転ヘラケズリを施す。4は口径12.0cm、器高4.9cmを測る。ここでは杯蓋としたが、本来は有蓋高杯等の蓋部で、つまみを打ち欠いて杯蓋として転用したものであろう。大井部と体部の境は、稜線というより段状を呈しており、その端部は鋭く仕上げている。口縁端部は内傾しており、端面はわずかな凹みをみせるのみ。天井部は丸みを帯び、1/2強の範囲に丁寧な回転ヘラケズリを施す。焼成も良好で、全体に丁寧なつくりである。大井部の「つまみ」は基部径2.3cm程。數度にわたって丁寧な打ち欠きを行い、「つまみ」の痕跡としては、破面がわずかに盛り上がりをみせるに過ぎない。

5~9は杯身である。5は口径10.1cm、受部径12.4cm、器高5.1cmを測る。立ち上がりは高く、真っ直ぐに立ち上がる。口縁端部は内傾して、端面は平坦に仕上げる。底部は丸みを帯び、全体の3/4に及ぶ範囲に回転ヘラケズリを施す。6は口径10.3cm、受部径12.4cm、器高4.8cmを測る。立ち上がりは高く、端部付近でやや外反する。口縁端部は段をなし、端面は凹む。底部は丸みを帯び、全体の3/4に及ぶ範囲に回転ヘラケズリを施す。焼成はやや不良で、軟質。7は口径10.3cm、受部径12.9cm、器高5.1cmを測る。立ち上がりはやや内傾気味で、口縁端部はにぶい段をなし、端面には弱い沈線が巡る。受部下が屈曲し、受部は水平方向に張り出す。底部は全体的に丸みを帯びるが、底付近は強け垂み、やや平坦となる。全体の2/3に及ぶ範囲に回転ヘラケズリ。底面にはヘラ記号を有する。8は口径10.1cm、受部径12.2cm、器高4.7cmを測る。立ち上がりはやや内傾して、端部付近でわずかに外反する。口縁端部は段をなし、端面は凹む。受部下は強く屈曲し、受部は斜め上方に張り出す。底部は丸みを帯び、全体の2/3に及ぶ範囲に回転ヘラケズリを施す。底面にはヘラ記号を有する。9は口径11.0cm、受部径12.6cm、器高5.1cmを測る。立ち上がりは高く、真っ直ぐに立ち上がる。口縁端部は段をなし、端面はわずかに凹む。受部は比較的短く、その下はわずかに凹む。底部は丸みを帯び、全体の3/4に及ぶ範囲に回転ヘラケズリを施す。底面にはヘラ記号を有する。焼成はやや不良で、軟質。

10は碗である。口径(復元)14.4cm、器高5.8cmを測る。摩耗がひどく、調整は不明。

(3) 主体部内出土の遺物(図13)

主体部内からは、奥壁側に残った敷石上から刀子が1点出土した。先端および茎部の一部を欠損する。両闘をなし、残存長11.3cm、刃部最大幅1.5cmを測る。

5. その他の遺構

調査区の西側隅に、焼土坑1基の一部を検出した(図14)。深さは40cm程度で、平面形は、調査区内では1/4程の円弧を描く。壁面の立ち上がりは比較的なだらかで、底面は平坦。

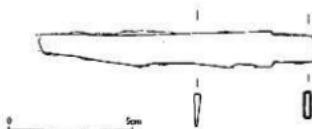


図13 主体部内出土遺物(1/2)

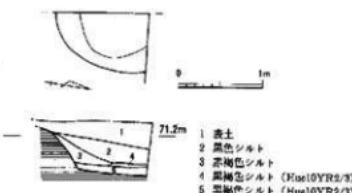


図14 その他の遺構(1/60)

IV 結語

ここでは、羽根戸古墳群G群第25号墳の調査所見について、特記事項、問題点を列記し、まとめに代えたい。

横穴式石室について

25号墳主体部は、いわゆる「堅穴系横口式石室」と呼ばれるものである。1) 長／幅比が1.8～2.0で、入門側が幅狭のやや羽子板状を呈する平面プランを有すること 2) 玄門付近は積石か、それに類する構造で形成され、その突出は顕著ではないこと 3) 敷石を有すること といった特徴を挙げることができる。羽根戸古墳群における過去の調査例において、25号墳主体部に関連する横穴式石室としては、N群中の7号墳主体部の存在を挙げることができる。玄室壁体の基底部に顕著な大形石材を配するなど若干の違いはあるが、ほぼ等しい平面プランを有し、構造上の共通性も多い。傾斜の緩やかな丘陵斜面の裾近くという立地の上でも両者は似ている。破壊の激しい25号墳の前部の構造はN群7号墳の有り様が参考となるだろう。現在までに、調査が行われて主部が判明している古墳で、「堅穴系横口式石室」を主体部とするのは、この2基のみである。だが、例えば同様の立地を呈するG群やN群中の諸古墳の調査が進展すれば、更なる類例の増加が見込まれる。

出土土器について

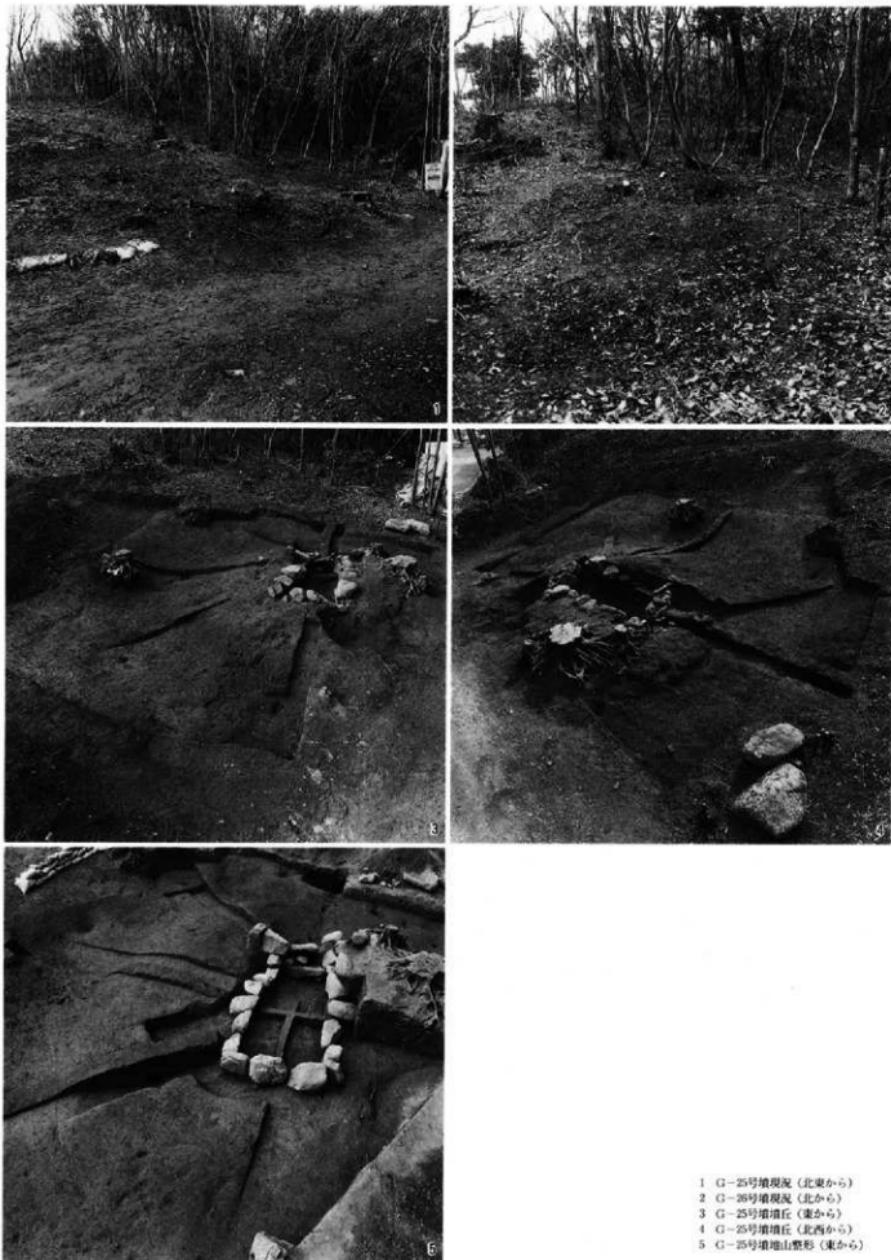
今回の調査により出土した遺物は古墳時代に相当するものに限られ、大きく1) 周溝山土器 2) 墳丘出土土器 の2つに分けることができる。1) 2) の資料とも須恵器、特に蓋杯が主体となる。

資料1) の蓋杯は個々にみれば細かい形態差を指摘できるが、ほぼ同時期の所産とみて良いだろう。陶邑編年でいえば、TK47型式期に相当するといえようか。2) 墳丘出土土器も細部に違いはあるが、同じく同時期のものとみなして良いだろう。こちらは陶邑編年TK10(古)型式期に当たるこができる。いずれの段階においても、墳丘等における容器類の供獻行為が中心で、上部部内への持ち込みが行われていないことは注目すべきであろう。

墳丘出土土器では、蓋杯1・2というセット関係をみるとことができたが、その組み合わせについて指摘しておきたい。まず、蓋と杯身それぞれの口径をみると、検出したセット関係ではそれぞれに違いが大きくなることが挙げられる。口径をみれば、むしろ蓋1-杯身2、蓋2-杯身1といった組み合せの方が自然であろう。次に胎上をみると、蓋1・2と杯身2は緻密な胎土であるのに対し、杯身1は砂粒を多く含む粗い胎土を使用するという相違点がある。以上をみると、蓋杯1・2は生産時本来のセット関係ではない可能性が高く、墳丘上における祭祀土器の選択、そして使用状況を考える上でも示唆的である。

使用時期について

土器の有り様から、25号墳は少なくとも2時期-1) TK47型式期(5世紀末葉) 2) TK10型式期(6世紀前葉)に渡る使用が認められることが明らかとなった。1) 段階が古墳の築造時に当たるのだろう。だが、2) 段階における祭祀行為が果たして追葬を伴ったかについては明らかにすることはできなかった。玄室床面には黄褐色土を厚く敷き入れており、これが追葬時の改変によるものである可能性も指摘できるが、追葬時にこれを行ふためには、畳石の再敷設、そして前底部石積みの構築といった人がかりな改変を伴うことになる。このことを考えれば、古墳の築造段階、つまり初葬の段階で黄褐色土上面、つまり敷石上が床面として機能していたと考える方が自然ではないだろうか。



1 G-25号墳現況（北東から）
2 G-25号墳現況（北から）
3 G-25号墳埴丘（東から）
4 G-25号墳埴丘（北西から）
5 G-25号墳地山整形（東から）

図版 2



1 G-25号墳石室奥壁（西から）

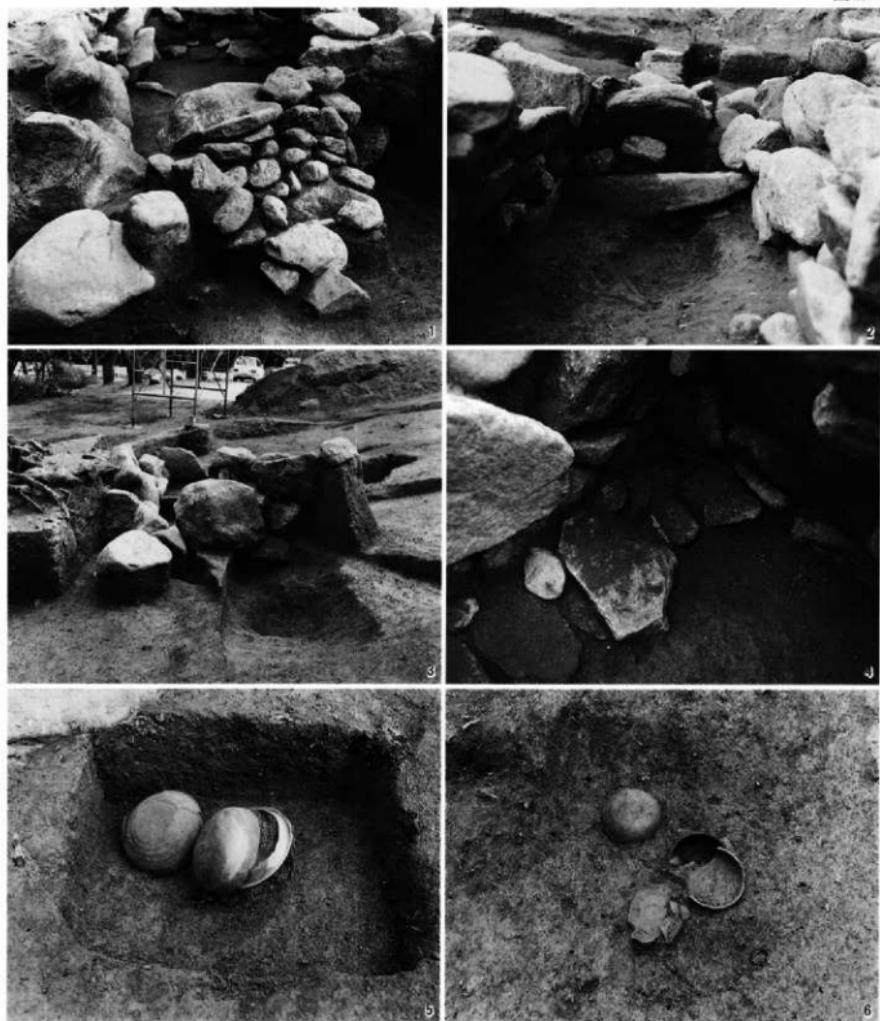
2 G-25号墳石室入口（西から）

3 G-25号墳石室左側壁（南から）

4 G-25号墳石室右側壁（北から）

5 G-25号墳石室奥壁左隅（南西から）

6 G-25号墳石室奥壁右隅（北西から）



1 G-25号埴輪塗状況（西から）

3 G-25号埴輪塞石（西から）

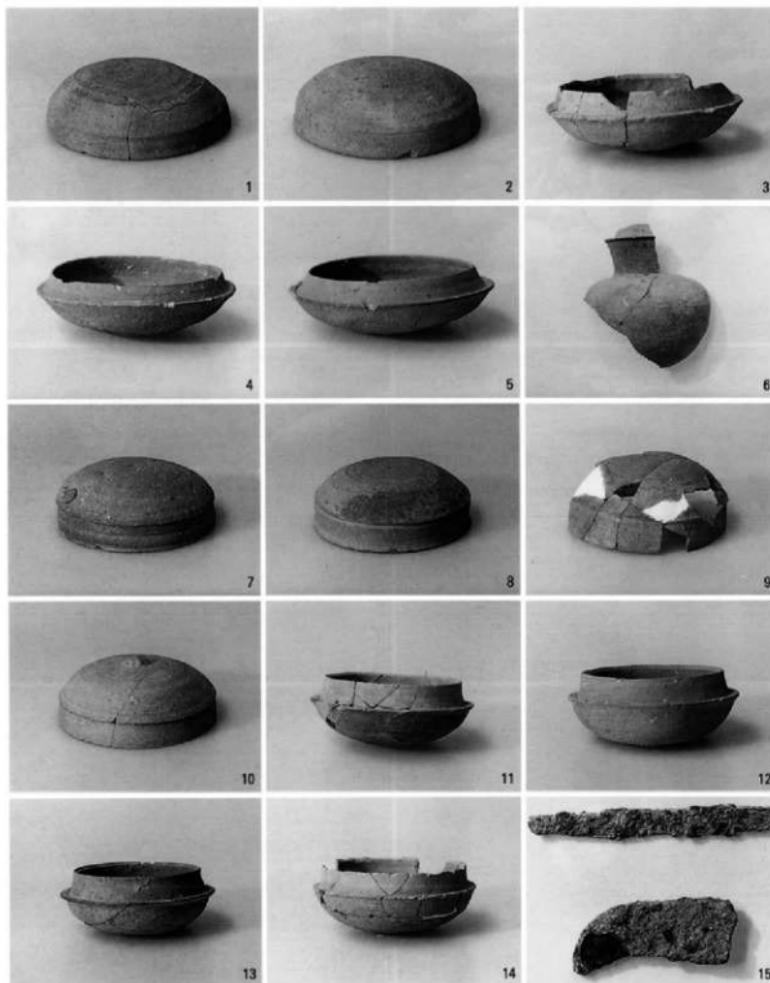
5 G-25号埴輪塗内遺物出土状況（南西から）

2 G-25号埴輪塗状況（東から）

4 G-25号埴輪室内遺物出土状況（北西から）

6 G-25号埴輪塗内遺物出土状況（北から）

図版4



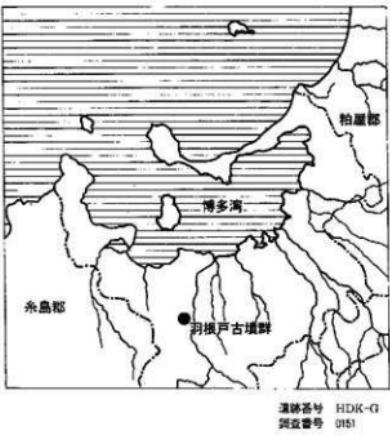
- | | | |
|----------|----------|----------------|
| 1 図11-1 | 2 図11-3 | 3 図11-5 |
| 4 図11-2 | 5 図11-4 | 6 図11-6 |
| 7 図12-3 | 8 図12-2 | 9 図12-3 |
| 10 図12-4 | 11 図12-5 | 12 図12-7 |
| 13 図12-8 | 14 図12-9 | 15 図11-12, 図13 |

羽根戸古墳群 5
— 羽根戸古墳群第25号墳の調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第769集

2003年（平成15年）3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号
印 刷 大光印刷株式会社
福岡市南区那の川一丁目13番16号



遺跡名号 HDK-G
測量番号 0161